

平成28年度 武道等指導充実・資質向上支援事業 武道指導に関する調査結果 柔道の授業検証 第2報

Research Report on the Support Project for the Improvement of Teaching Content and Ability in Budo Classes at 8th Grade: Judo

キーワード：形式的授業評価，愛好的態度，課題解決力，技能の習得・向上
Keywords: Formative class evaluation, Fostering positive attitudes,
Task-solving ability, Skill improvement

佐藤 愛子

SATO Aiko

若山 章信

WAKAYAMA Akinobu

I. 背景と目的

平成24年度より、中学校第1・2学年の保健体育で武道・ダンスが必修化された。武道の種目は学校ごとに選ぶことになっている。武道必修化実施3年目を迎えた平成26年度、文部科学省が公募した委託事業「武道等指導推進事業（武道等の指導成果の検証）」において、本学の起案が採択され、学内外の有職者による調査研究協力者会議を立ち上げた。

本研究1年目にあたる平成26年度は、都道府県・指定都市教育委員（n=67）、市区町村教育委員会（n=1,084）及び、二重盲検法により無作為に抽出した中学校176校（教員176名・第2学年の生徒5,577名）を対象として、武道に関する全国的な指導状況調査を実施した。その結果、第1・2学年における武道の実施種目は、柔道63.4%、剣道34.1%、相撲3.5%であった。これを受けて平成27年度から平成29年度の3年間は、「武道等指導充実・資質向上支援事業（指導成果の検証）」をテーマとした。武道指導の充実を図るために中学校第1～3学年までの3年間を見通した指導計画を作成し、モデル校を抽出し「指導と評価計画」の授業検証を行なった。

II. 方法

1) 調査対象

練馬区立A中学校において、男女2クラス（第1・2学年男女計153名、なお、第3学年は現在データを集計中）9時間単位の柔道の授業検証を行った（男女別習）。教員は、原則として柔道を専門としない男女異なる教員が担当した。

2) 指導と評価計画の内容

第1学年は、平成26年度の全国調査結果を踏まえて授業検証を実施し、第2学年は、前年度の実施状況をもとに指導計画の一部を修正して検証授業を行った（詳細は結果に明記）。

3) 検証方法

単元終了時のアンケート（質問紙調査）

単元終了時に生徒にアンケート調査を実施した。第1学年の調査結果は、全国調査結果との比較考察を行った。第2学年の結果は、全国調査結果及び経年比較における考察を行った。統計処理では「そう思う、だいたいそう思う、あまりそう思わない、そう思わない」の4段階評価について、カイ二乗検定を用い

て検定し、有意差が認められた場合は、さらに残差分析によって、いずれの段階に差がみられたかを検定した。危険率の有意水準はすべて5%未満とした。毎授業ごとのアンケート(形成的授業評価)

毎時授業時に実施したアンケート(形成的授業評価票)は、単位時間ごとに「成果、意欲・関心、学び方、協力」にかかわる9つの設問に、「はい、どちらでもない、いいえ」の3段階で回答させ、その因子ごと及び全体の平均値(総合)について、表1の基準に基づき5段階評価に換算した。

III. 結果・考察

1) 第1学年の検証授業の結果と課題

第1学年は、以下の3つの課題を柱として授業検証を実施した。

①「柔道の特性や楽しさに触れさせ、興味・関心

や期待感を高めることで愛好的態度を育成する」、②「課題解決の機会や手立てを与えることで課題解決能力を高める」、③「技の系統性を生かした段階的な技能指導を実践することで、安全で効果的な技能を習得する」

形成的授業評価の男女の得点・推移の結果は表2、表3のとおり。

①愛好的態度の育成

質問紙調査では、「柔道の授業が好き・楽しい」の肯定的な回答がいずれも全国平均を上回り、有意な差が認められた。形成的授業評価では、「意欲・関心」は時間を追うごとに高まりがみられた。これらの理由として、指導案の修正・工夫により生徒の主体性が引き出され、愛好的態度の値が高まったと考えられる。

表1 形成的授業評価平均値の5段階評価換算規準

項目	評価	5	4	3	2	1
成果		3.00～2.70	2.69～2.45	2.44～2.15	2.14～1.91	1.90～1.00
意欲・関心		3.00	2.99～2.81	2.80～2.59	2.58～2.41	2.40～1.00
学び方		3.00～2.81	2.80～2.57	2.56～2.29	2.28～2.05	2.04～1.00
協力		3.00～2.85	2.84～2.62	2.61～2.36	2.35～2.13	2.12～1.00
総合		3.00～2.77	2.76～2.58	2.57～2.34	2.33～2.15	2.14～1.00

表2 形成的授業評価の推移(男子)

時間目	1時		2時		3時		4時		5時		6時		7時		8時		9時	
	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価
成果	2.77	5	2.82	5	2.85	5	2.86	5	2.85	5	2.90	5	2.89	5	2.83	5	2.88	5
意・関	2.86	4	2.95	4	2.96	4	2.96	4	2.95	4	2.96	4	2.97	4	2.98	4	2.96	4
学び方	2.66	4	2.85	5	2.88	5	2.86	5	2.91	5	2.92	5	2.94	5	2.93	5	2.96	5
協力	2.92	5	2.97	5	2.96	5	2.97	5	2.97	5	2.97	5	2.98	5	2.98	5	2.98	5
総合	2.80	5	2.90	5	2.91	5	2.91	5	2.92	5	2.93	5	2.94	5	2.93	5	2.94	5

表3 形成的授業評価の推移(女子)

時間目	1時		2時		3時		4時		5時		6時		7時		8時		9時	
	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価	得点	評価
成果	2.70	5	2.80	5	2.81	5	2.85	5	2.85	5	2.80	5	2.86	5	2.86	5	2.84	5
意・関	2.80	4	2.89	4	2.96	4	2.92	4	2.92	4	2.91	4	2.96	4	2.95	4	2.93	4
学び方	2.73	4	2.82	5	2.87	5	2.81	5	2.85	5	2.83	5	2.91	5	2.89	5	2.84	5
協力	2.89	5	2.94	5	2.92	5	2.94	5	2.90	5	2.91	5	2.93	5	2.91	5	2.94	5
総合	2.78	5	2.86	5	2.89	5	2.88	5	2.88	5	2.86	5	2.91	5	2.90	5	2.89	5

②課題解決力の向上

質問紙調査では、「思考・判断」の項目は約8割を示し、全国と比較しても有意な差が認められた。形成的授業評価では、「学び方」に一定の高まりがみられた。理由として、課題解決の機会や学び合いの時間を入れたことで思考・判断の値が高まったと考えられる。

③技能の取り扱いと習得・向上

質問紙調査では、「基本動作」、「受け身」、「抑え技」、「投げ技」共に全国平均を上回り、有意な差が認められた。形成的授業評価では、「成果」に一定の高まりが認められた。理由として、段階的・系統的な学習指導により、技能習得の値が高まったと考えられる。しかし、抑え技の「返すこと」のみ全国平均を下回った。

以上の結果から、検証授業の単元計画の工夫・改善により、3つの課題においておおむね一定の成果がみられた。しかし、時間不足、練習方法の選択、教材開発、課題解決に関する手立て不足、展開の工夫、抑え技に関する指導の在り方の検討などの課題が明らかとなった。

2) 第2学年の検証授業の結果と課題

前年度を受けて第2学年は、講話、グループ学習、ゲーム的要素を含む教材、攻防の時間の確保、技の精選などに留意し指導計画の一部を修正した後、授業検証を行った。第1・2学年の形成的授業評価(総合)の男女の平均値を表4、5、経年比較を図1、図2に表した。その結果、第2学年の男子が4、女子が4.3と共に平均4を越える高得点であるが、第1学年に比べると男女共に約1ポイント下がった。

①愛好的態度の育成

質問紙調査では、肯定的な回答は7割を示し、全国調査を上回ったが有意な差は認められなかった。経年比較は、下降したが有意な差は認められなかった。また、形成的授業評価の経年比較では、愛好的態度を高めるために指導計画の修正・工夫を行ったが、「意欲・関心」の平均評定が下回った。これは、初めて柔道を習う初年度に比べて柔道の授業に対する期待感が薄れたこと、技能差が広がる中、新しく習う技が難しく感じられたこと、学年が上がり自己評価が厳しくなったこと、授業担当者や施設の条件が変わったことなどが理由として考えられる。

表4 平均値(男子)

因子	1年	2年
成果	5	4.2
意・関	4	3.3
学び方	4.9	3.9
協力	5	3.9
総合	5	4

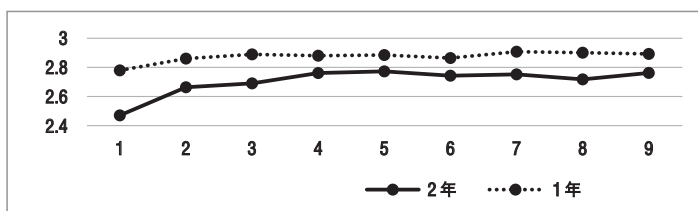


図1 経年比較(男子)

表5 平均値(女子)

因子	1年	2年
成果	5	3.9
意・関	4	3.8
学び方	4.9	3.9
協力	5	5
総合	5	4.3

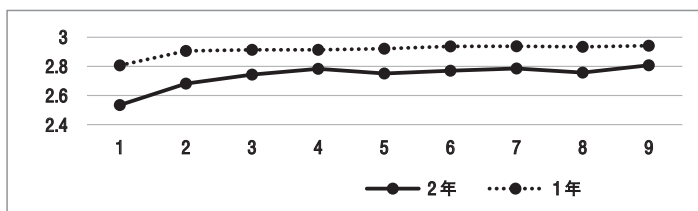


図2 経年比較(女子)

②課題解決力の向上

質問紙調査では、「思考・判断」に関するすべての項目で9割が肯定的な回答を示した。全国と比較してもすべての項目で数値が大きく上回り有意な差が認められた。経年比較では、すべての項目において上昇したが、有意な差は認められなかった。また、形成的授業評価では、「学び方」において、前年度より下回ったものの、平均して高い値であった。これは、課題解決の機会を与え、その手立てを示す工夫を取り入れたことが要因だと考えられる。

③技能の取り扱いと習得・向上

質問紙調査では、「技能」に関してすべての項目で肯定的な回答が多く、全国平均を大きく上回り有意な差が認められた。経年比較では、大きな差はなく有意な差も認められなかった。また、第1学年で最も低い数値を示した「抑え技を返すこと」が全国平均・経年比較において第2学年の数値を上回り、有意な差が認められた。理由として、既習技を使った攻防を繰り返したことが成果につながったと考えられる。

以上の結果から、各因子を総合的に見ると、経年比較は値が下がったものの、3つの課題において一定の成果を読み取れた。これは柔道の特性や楽しさに触れる場面を意図的、計画的に仕掛けた指導計画を立案し、それを授業者が適切に実践したことによるものと考えられる。

V. 今後の課題

以上の調査結果から、第3学年の授業検証は、引き続き安全性に考慮しながら、①愛好的態度の育成、②課題解決力の向上、③技能の取り扱い・習得・向上の3つの課題に留意し検証を進めていくことが重要であるだろう。

なお、本研究の内容は、文部科学省委託研究の趣旨にあったように、今次の学習指導要領改訂に大いに資することができたと考えている。

VI. 参考資料

- 1) 文部科学省(2014) 学校体育実技技術指導資質第2集柔道指導の手引。(三訂版)
- 2) 文部科学省(2008): 中学校学習指導要領解説 保健体育編
- 3) 高橋健夫編著(2003): 体育授業を観察評価する。pp. 12-15, 明和出版, 東京。(一部改編)

VII. 公表資料

- 1) 東京女子体育大学(2015): 文部科学省委託事業「武道等指導推進事業(武道等の指導成果の検証)」調査報告書, Pp. 201.
- 2) 東京女子体育大学(2016): 文部科学省委託事業「一武道等指導充実・資質向上支援事業一に係る武道指導に関する調査」調査報告書, Pp. 138.
- 3) 東京女子体育大学(2017): 文部科学省委託事業「一武道等指導充実・資質向上支援事業一に係る武道指導に関する調査」調査報告書, Pp. 154.

付記

本報告は、上記公表資料の報告書より抜粋したものである。なお、調査研究協力者会議(柔道担当)の下記メンバーの代表として、佐藤と若山が執筆したものである。

【調査研究協力者】50音順

磯村元信(東京都立秋留台高等学校長)

熊野真司(練馬区立練馬中学校長)

佐藤愛子(東京女子体育大学 講師)

塚田真希(東海大学 講師)

野瀬清喜(埼玉大学 教授)

本村清人(公財)日本学校体育研究連合会会長

(元東京女子体育大学 教授)

若山章信(東京女子体育大学 教授)

渡辺冬花(千葉市立幕張中学校教諭)